

私と天文学 [X]

餌取章男 (サイエンス編集長)

望遠鏡に熱中する天文少年でもなく、星の神話を読みふける文学少年でもなかった私が、宇宙というものに深い関心を寄せるようになったのは、何といても世界最初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げが大なきっかけであった。

1957年、大学4年生の私は、ある科学雑誌の編集部でアルバイト記者をしていた。アルバイトとはいえ、記者としての名刺を持ち、いろいろな先生のところへ原稿依頼に行ったり、時にはカメラをぶらさげて取材に出かけたり、自分で原稿を書いたりすることができ、いっばしの科学記者気どりであった。この時の仕事の面白さが、科学ジャーナリストへの道に私をかり立てたひとつの大きな要素になっている。

さて、11月号(10月はじめ発行)の特集として、その雑誌は少し早過ぎるかなといひながら、人工衛星をテーマにしたのである。発行と人工衛星の打ち上げ成功(10月4日)がぴったり重なって雑誌は創刊以来初の売り切れ、前代未聞の増刷まで行なうという騒ぎになった。その直後に、たまたま広島取材のために来日したオーストリアの科学ジャーナリスト、ロベルト・ユンクをホテルでつかまえ、口説きに口説いて“天体海洋への道”という原稿を書いてもらうことに成功したこととあいまって、私の宇宙開発への興味は決定的になったのである。

大学を卒業してテレビ局への道を選んだ私は、すぐれた科学番組の制作を目標に、10数年のプロデューサー生活を送ったが、コーヒー茶碗の中にミルクで星雲をあらわしたり、ケープケネディの発射台に感激したり、天文・宇宙に関係したことがらの印象はつきない。なかでも、アポロ11号の月着陸のときの感激は、いまでも少

しもうすれることがない。テレビ局のスタジオで実況解説をしながら、自分で一生のうちに一度はぜひ宇宙空間を旅してみたいと心から思ったし、今でもその思いはつづいている。

「サイエンス」という雑誌の編集にたずさわようになってからも、ブラックホール、パルサー、ビッグバン……と、あいつぐ天文学の発展に接し、宇宙への興味はいやでも持ちつづけざるを得ない状況がつづいている。それに、1986年にはハレー彗星が接近する。そろそろ、宇宙のスターよりも、地上のスターの方が好きですよ。などとはいつてられないのかな、とも思う。

レーガン大統領はシャトルの後の宇宙開発計画として宇宙ステーションの構想をかかげ、その協力を世界各国に要請している。日本がそれに参加するかどうかは、いろいろ議論のあるところであり、学審の委員として私も多くの専門家の意見に耳を傾けているが、やはり、人類の未来ということを考えれば、こうした未知への挑戦も大切なことであろう。国際協力の実践の場としても、日本が積極的に参加することが、今後のわが国の繁栄に何らかの貢献をすると予想できるからである。

◇ 10月の天文暦 ◇

日 時	記 事
2 7	上 弦
8 12	寒 露 (太陽黄経 195°)
8 24	月 最遠
10 9	望
11 3	水 星 外合
18 6	下 弦
23 15	霜 降 (太陽黄経 210°)
23 23	月 最近
24 21	朔
25 17	冥王星 合
31 22	上 弦

